福祉見直しの一角

任運荘も七年が過ぎた。開所当初の五十人のお年寄りも今は六人しか残っていない。特別養護老人ホームはやはり死の待合室のようだ。

沈丁花（じんちょうげ）の香るころ、またその中の一人Aさんが旅立った。彼女は入所して三年間は望郷の念に狂ったような日々であった。実子が数名もいるのに、生前だれも面会に来なかったのがその原因らしい。彼女はやがてあきらめ、寮母の温かいお世話もあって、「任運荘がふるさと」と思い直し、平安な晩年をまっとうすることができた。

死亡を知らされた長女（久留米市）はまず電話で依頼してきた。任運荘で葬式を、金はないから簡略にと。到着も遅く、夜勤寮母が二晩も側で仮眠してお通夜をつとめねばならなかった。母に対し生前も死後も非礼に徹した彼ら子らである。だから、目の前でお棺をかつぐ事務長にも、長年献身的につくした寮母たちにも、お礼のあいさつはついに聞けなかった。Aさんの残した貯金は百五十四万余円。長男は冷静にそっくり懐にして立ち去った。

Aさんが任運荘に入った時はもちろん無一文。でもここでは生活は保障されているから、福祉年金（障害）はたまる一方である。このことはAさんだけでなく、全老人についていえる。だから貯金額は平均一人約八十万円になっている。家族の二割程度がホーム経費の一部を負担しているだけで、多くの家族は老親をタダでホームに任せきりにし、死亡すれば無条件で遺産が入ってくる。

福祉年金は家庭にいようが施設に入ろうが等しく支給される。これはだれが見ても不合理不公平な仕組みである。反動的な福祉政策に悪乗りされるから、福祉関係者は気が付いても、「福祉見直し」を具体的に指摘しないらしい。しかし、この不合理は早く見直すべきものの一つである。

顔色一つ変えず母の遺留品を納め去った息子の名刺が残されていた。肩書は「××総連委員長」。それが妙に脳裏について離れない。

（一九八二年七月三日）